

5. 52. 10. 23

郷土資料 増林地区の自然、記念物と考古資料（三ノ仏・イダノ仏等）

第八十二回史跡めぐり

林泉寺
勝林寺

越谷市郷土研究会

第 四 史 跡 めぐり 案内

一 日 時 昭和二十一年十月二十三日

一 集 合 午前九時至十分北越谷駅

一 場 所 越谷市

越谷市 越谷市

越谷市 越谷市

越谷市 越谷市

越谷市 越谷市

越谷市 越谷市

一 コー ス 東武バス野田行

新方橋下連 林泉寺へ：頭止の標

勝林寺へ：二十一仏

一 会 費 三〇〇円 并当各自ご持参下さい。

主 催 越谷市郷土研究会

目 次

概 説 (田村のちから) …………… 二頁

新編武蔵風土記稿卷之二百六

埼玉通之八 一七七頁下段より

一七八頁下段まで

細 説

越ヶ谷市の史跡と伝説より …………… 五頁

金石文資料集より 十三仏 …………… 二頁

皇野橋治氏の二十一仏論説 …………… 九頁

其の他

文化財指定一覧表より

市指定天然記念物

市指定文化財

考古資料 二十一仏

※ 志 察 山岳信仰と川原川旧利根川沿線……………四頁

右 本文記載の所談として掲載し、細説

にわたり御研究の方は参照して下さい

関係ある方は研究会(市立図書館四)へ

お問い合わせ下さい。

◎見学予定地の概観

一、武蔵富士記高橋二四六一崎五崎の八（一七七番）
 増森村の境に五ヶ所、次のように書かれてある。

増森村は江戸への里道と里、区戸百三十、西は増
 森村、南は元荒川を隔て、東方村に接し、東北は古
 利根川を廻らし、川を越えて沼澤原川跡下、赤岩二
 村なり、東西六町、南北十五丁、用水は増森村より
 引取り、都入回以米御料所にして、検地は新村と同
 じく、元禄八年、酒井河内守、其せり。

- 高札場 北の方にあり
- 水 名 西川組、新田組
- 古利根川 東北を流る。幅四十間許
- 元荒川 西の方を流る。幅二十五間
- 千間堀 村の中程を流る。岩槻領諸村の用水路に
 して、未だ古利根川に入る。
- 香取社 東正寺の持

○ 水神社 金栗原村、一、二社村の鎮守はり。

○ 弁天社 東正寺持

○ 第六天社 消災院持

○ 稻荷社 一は東正寺、一は観音寺、一は二社村
 消災院持はり。

○ 東正寺 新設真言宗、下総國清水村の金栗院の末
 流池田不働一と号す。本尊、唐蘇大日を

安ず。坐像にて長六二尺餘、蓮慶の作と云う。天
 文二一年の起立にて開山、貞永天正四年八月四
 日遷化せり

○ 鐘 鐘は近年の一なり。

○ 不働堂、 天神社 消災院
 同安南末、一坪田と号す。大永三年尊賢
 と云う鐘の立本尊、消災院を安ず

○ 観音寺

○ 金栗院 東正寺持、下二ヶ寺に同じ、元和元年
 消災院の鐘なり。本尊十一面観音は
 後年の作なり。立像にして長一尺三寸餘

○ 不助堂

○ 眞正寺

○ 眞光寺

○ 清寛院

○ 慈光庵

○ 東光庵

註 東正寺改め堂正院とする。この場合東正寺持は 堂正院持とみる。

二 増林村

増林村は民戸二百四十 東西二十町、南北十三町 許南は山林村、東は増森村、西は葛西用水堀を隔てて大吉村、北は吉利根川を越えて葛飾郡上下赤岩村なり、用水は松伏溜池井より引汲げり、御打入より今に御料所にして、檢池江戸への行程等は前村と同じ。其餘後年無事の地同、享保十六年紫村藤右近門伊藤市兵衛、寛延三年塩谷八太夫、別松返右近門、延享三年舟橋安右近門、宝曆五年山野佐太夫、明和七年遠藤兵衛近門等檢地して高税を定めしと云々、

高札場 東の方
にあり

○ 吉利根川

東の方を流る。これを吉野川と葛飾郡との界に於て此川に葛飾郡松伏、二郷半

東葛西上の割、下割、西葛西、幸手領、半高尾、北葛西、谷吉、尾、及中、八条、新方、都合

ハケ領半組合の割井あり、其を松伏溜井と云う、此村と大吉村境に於て一溪を分てり、これ則前のハ

條、谷吉田、湖江、葛西四ヶ領の用水にて、其を西葛西用水と云ふ、葛飾郡松伏村溜井の界

を更ふ。 ○ 丸光寺 南に流る。市

○ 試洞社 村の鎮守。 ○ 末社 山王

○ 香取社 二字 村一は堂正院、一は葛飾郡あり。

○ 八幡社 松光院 爪社 稻荷 稻荷社 源

○ 天神社 一は大正院持、一は村改持。 明神社 大正院持

○ 林泉寺 浄土派 江戸芝罘上寺末、正林山と号す、備前山、寛文元年三月示寂す。

○ 鐘樓 享保三年鐘 鐘音堂 正觀音及び子安觀音の二体あり

○ 勝林寺 釋宗普賢、源下流村、鐘樓寺の末、法親山と號す、此山、鐘樓寺は天文と其四

鐘樓 鐘音堂 鐘樓 鐘音堂

日敷す。十一番鐘 鐘樓 鐘音堂の

○ 観音堂 ○ 稲荷院 新設、観音堂、意旨不明、昭和十一年十月廿九日遷座す。

本尊は正観音を安ず、兩山長清、寛文三年正月廿九日遷座す。

○ 宝蔵院 同院、下総國葛飾郡清水村金安院の本尊、入初とす。昭和十一年十月廿九日遷座す。

昭和十一年十月廿九日遷座す。

○ 法立寺 日蓮宗、下総國平賀村末土寺末妙富山とす。兩山正保元年十二月十日

示燈不尊
三聖

三十番神堂

○ 清傳寺 林泉寺末、日蓮宗、真取山とす。本尊、明應元年十月十日遷座す。本尊、明應元年十月十日遷座す。

○ 淨泉院 同末、本尊、明應元年十月十日遷座す。

○ 清了院 勝林寺の末、本尊、明應元年十月十日遷座す。

高野郡幸手不動院の配下、善正山とす。本尊不動。

○ 大正院 同院下、増林山とす。本尊も又、前に同じ。

○ 紫師堂

○ 虚空蔵堂 ともに福壽院の持せり。

注 史蹟と文化財とから、越谷発展の経路が浮かびあ

来る。鎌倉以後の政策、古河公方と幸手の勢力、下総と北条の接点、大相模、陸奥と用水の旧道、旧利根川を背景に展開し文化の交流も陸路は徳川以後なり。

越谷市文化財

一 法立寺の崩止めの様 樹種らんまま

前掲露天焚記念形 (まき科に属す)

二 所任地 越谷市大字磨林三八一三番地

三 指定年月日 昭和四年一月十一日

解説

昔 東照公(家康)が、この地方で野遊びの折、当寺に立寄り、泉馬をなま、山隠されたと伝えられる。尚口をすすす、手を洗われたと伝えられる。推定持戸も境内にある。

注 ①らんまは 中国原産の常緑針葉樹で、雌雄異株であるが、崩止めのまきは雄株である。

② 樹種らんま

③ 樹種らんま

④ 樹種らんま

野遊びとは 鷹狩りをさす。即ちが狩りの折

に当山に立ち寄りられたと解してよからう。鷹狩りの折のもく、鷹の鷹巣が窺えるのである。

① 林泉寺

其の寺の位置を記し、

浄土宗林泉寺は、地味と稱し、同寺の約五百年前
文正元年平峯上人が湖山、本誓の寺の公認、其際
應に惠心の作りの形跡をまつてゐる。現在が三十一
代木村領域である。

昭和二年三月十五日、住者と人の筆による白標紙
は「林泉寺湖山、貞和二年戊午當年当乙亥迄三四の
年、古は觀音の別当にて、平福と海伝え申候、其時
代の年野に正愛音の御衆に犯しあり、文正元年丙戌
年にて上人地となり、前のはな紀門、兄の方に氏社
古の観音地なり、當時上人、寺と改め湖山本誓と入
正林良徳和尚、長享元年三月十五日無事」と述べら
れてゐる。

湖山前百廿年頃、當時門前の治定紀門へ現標本助右
紀門氏(遠敷へ観音寺地所告候)にオリツルを拜つ
た白衣の行禿が此地に觀音を安置し、のがちのはじ
まりらしい。

寺の寺文書や証書によると、この地の發原は北条
の落武者が姓交替を湖林に土着し農を營むるにな
つた。これを元祖としてゐるのに関根家や宮川家が
ある。土地の名は皆覽音を慈心に信加し、土地など
を寄進し次第に寺が繁栄して来たのである。境内は

六十町四畝の広い寺域となり、慈願堂、觀音堂不動堂
が次々と建立された。このような寺の形骸は、真喜松
の寺域であるので、是處年画に改宗されたのであろう。
湖山の別建別支の確立、幕府の政策による檀家制度
は悉くには仰かざる限り、寺に對する寄附なども多大に
なされた。當時は、代將軍吉良の喜保から富田氏に
承継(喜保二年)富田屋(喜保三年)が建立され、觀
音堂が改築されたのである。

本堂の大きさは五間四寸、宛に存する末塗の内は、
當時の金と珍画で建てられたと過去帳の余白に詠入ま
れ、又天災等も詳細に記録されている。

② 駒止の處

赤吉が車田原派の北条氏を倒し全国を統一し、泉康が
江戸城に入った翌年、天正十九年徳川永祿、農氏の視
察、費越び(藤袴り)蹄を減収てこの地に來り、この
時、林泉寺に立寄り、駒をつないだと云われる標の水
がある。これを駒止めの標と呼ぶ。

現地でごらんの通り、この地境では見られない
ような立派なもの、由來一の標の水である、或
谷市の文化財の指定になつてゐる。

⑩ 権現井戸

当山に立寄りし家康に茶を接待した。その水と湯んでと書かれた井戸を権現井戸と呼んでいる。現在は、水が湧かなくなっている。今から八十一年位前遠江津波が湧出していたと云われている。宮内省蔵する「権現井戸の跡」の碑が立っている。『権本英藏書』と記されている。この記述通り、木村氏蔵、権本英藏、海州正文の各氏の寄附によつて建てられている。この裏面に、権本英藏氏が由来を記している。

附 宗 記

爾ク 慶長十一年遠江府府司を以て天武の皇に承る也
母に当山に鎮ひて皇の社に及びを敬と云ヒリと、余昭
和十一年七月、遂に藤中の一、古文書に之を徴む。乃
ち、当山三十一世水村長純師に示す、亦其の跡を悉く
遺徳無代流田正文氏之を識り共に余に記を求む。因て
銘して後世に伝ふ。

昭和十二年 三月

正林山林叢寺遺徳無代権本英藏様文并書

寄附者

- 木村 良純
- 権本 英藏
- 海田 正文

然し下ら家康公がこの寺に立寄つたとの記載は残念ながら見当らない。そこで林泉寺の山主、木村氏に伺いし、まじやと云ふ。

「越谷市桜井林西寺に有名な谷重上人が居り、家康は上人に会おうとして越谷へ来た。然し上人は合う二とを嫌ひ逃げ去っている。その時偶然家康と掘で会い、その川を「念の川」と呼ぶようになった。

これらの事から、家康公は越谷に来られた事は確かであろう。といわれた。

又 大相模大室寺に来られたと云う記録等もあり、この時にては林泉寺に立ち寄られたとも考えられる。

⑪ 注仏専用の御書籠

江戸時代中期より当山歴代住持が公式の外出に用いたる駕籠が寺の宝庫として本堂の廻廊の天井に吊るされて居る。古くは紙をかつているが、内側は糸塗りにて、肘掛け、吊綱があり、裏は青紙の布、日除け御簾、窓の三段に作られており、駕籠の長さ一・二米、巾〇・九米、高さ一・二米の大ききものであり立派なものである。

尚、これに寺僧が上人のお伴をする時、持つて来た櫓、鎌刀なども保存されている。

越々市の史蹟と伝説しより抄録。

⑤ 觀音堂 (林泉寺)

觀音堂は四角四面、鎌倉時代の定朝の作と云われる。母の丈一尺八寸の正麗畫と、それに日本ならざるしずめ運慶と評される支那古代の彫刻師ビシマカツマの作の子安觀音像が二体安置されている。

◎ 正 觀 音

正觀音は風水害母による飢饉などの年に、住職は正觀音像をけりぎ、江戸に出る意向に於て二十一日岡の彌陀帳で、寺の一年間の生活費が奉納されたと云われる程、盛大なもので信願のあった觀音であるが、現在はお出願帳は行っていない。

◎ 子安觀音

子安觀音は崩すと尺、純金箔の御厨子の中に蔵つてある。この子安觀音は現在でも極めて信願が豊いので次に寫緣起を紹介しておく。

子安御厨子安願言菩薩寫緣起記

邦々当寺奉安蓮子青子安觀古菩薩像は美濃瑞應天の作にして三層係承徳無文の尊像也。昔仁明天皇の御宇慈覺大師入靈の時、生身婦女殊菩薩を尊せんとため大唐五台山にこもらせたまふ。拵から忽然として一人の童子現れ大師に示して曰く、汝法法の慈尊

く、彼の滄海万里の波を引て法を此國に求むること賢くも亦殊勝也。我汝に一つの仙像を授与せん。昔美須羅龍天の作にして今に至つて無漏をふり伝する入希にして利益時を失い顯験かくるるに似たり。

若し人阿つて信を此尊にかけ、念願偶りなき等こ觀に横濟横死をのぞき龍庭にのぞむとまは……又

中 愿

彼の法縁を諸公汝の家にお安置すべし。汝の身において殊々信を著し、道所力厄難を除去人の爲、身の爲に急る事勿れ。時に葛村在門靈夢に驚き、夢現て殊々信を著し、始經在江て身を淨め、夜も明けぬれば決に出向ひ金花をまき信心の夢を合せ、一心殊々名徳を著し、道所力厄難を除去と云ふ途か向うに一瓶の舟采り既に彼岸有りぬれば大師に廻遇し、恭敬し敬礼拜し、夢の双弟を語りしに、大師も亦人の信心を感じ、此の尊像を死安勤石在門に歸付願有りしより、其所において靈驗利益多かる中に別る。安産の守り強くありし故、勸む衛門信心より此尊持ありとて、元安勤石衛門を産安勤石衛門と名せ

中 愿

汝の申願武勇増林、林泉寺住持三尊は我に宿縁深く誠に尊修念仏の尊師されば汝に我を彼方にいさむいて汝等共に浄土の安んぬる法門を受け、凡俗の

往生を致すべしと、臨終を蒙り、願上人等に仏刹を詣り、瑞喜の深にむせば、此尊像を守り奉り、武儀国塔林に來り、三營に仏刹を異に詣るに上人も慕ふて、寫生を蒙りしとて、等に感涙にむせば、跡と信心を漸進し、不断念仏の行者と成り、一生不返に同行して、許國の往生を遂げせしとなり、此尊像前に坐り、近々に坐る能く、難産の憂なく、信心の壽は代の齋戒を成就し、現に痲病、痲症の毒の致す危難を払い給ふ、靈驗寺遷かざるにいとまなし。

後 塔

洞窟の其一「種草」は深くこの觀音を信仰し、福利益があつたことを記してある。

※

※

※

この寺の古い銘文には、この觀者は往古にオイツルを著つた白衣の行者がこの寺にたどりついて、附近の者に法を説き、いづこともなく去つた跡に残されたのがこの像だと言われている。

白衣の行者が海を渡つて來たものか、それとも河辺の人が定かではない。

寺の觀音は安達寺の仏像

この仏像を信仰すると、難産しない。お産が軽いと言ふので、評判になつた。觀音像は毎年四月十八日。

この日は門前に于て觀音の「ノボリ」が立ち、朝早くから当地に嫁いだ人や、他の地に嫁いだ人達が、花嫁姿の盛装で参詣し、安産を祈り、又子供が成長を祈願するのどある。この日の参詣者はお供え餅を觀音堂にあげ、甲斐の刺短用ロートクと上袂え餅をお供物として頂き、家族の者が領ち戴く習慣になつてゐる。其の参詣者数に多くない境内が、入で埋まる程である。

◎ 佛 師 像

塔林と遊方寺を所有である。佛師像は鎌倉時代以前の通りである。佛師は建初である。外見は余り古い様には見えない。中の造りが長く、手斧で仕上げた跡などが見え、鎌倉時代の礎を認ばせている。本尊は佛師如来は、願成就を祈す如來像にして、古から塔林地区上組の兼願如來として信仰されている。この佛師像の建物が鎌倉時代のものとするれば、安達寺が在る所である。その被褥が細いのはおかしい。然し彫刻が、よくて、失くされたものか、おかしくない。その理由が解らないが、現に佛師の像が、安達寺の佛師像は、石仏が、良いものが、多い所である。この佛師像に、安達寺の佛師像時代の佛師は、珍らしいものである。

（越谷市の史蹟と名産）より。

☆ 越谷市増木林の山王二十一佛板碑

委員 皇野村自治会

一 はじめに

石造遺物である板碑の中で二十一仏板碑について論じられた研究論文は、私の見た範囲では極めて少ないように思える。しかし、昭和八年に飯部清道博士が著わされた禹嶺前大著

「板碑 概説」

の中の「二十一仏板碑と山王一葉淨道」をはじめとし、近年においては、教養雜誌天海士の

「庚申禱と山王信仰」、文京区史 巻一、や

三輪善之助氏をはじめとする、庚申齋會々誌による「庚申」誌上の研究論文があり、その研究はほとんど放棄されているように思える。

二 山王二十一佛板碑の概説

板碑に刻まれる二十一佛の種子が、何を意味するか又しく學界において謎であつたが、これを山王二十一社の本地仏であると最初気付かれたのは、当座天台宗の僧籍に入つておられた飯部清道氏と考古學とくに板碑の研究者として名を馳せることの出発点三輪先生の功徳といわれる。

山王二十一社は比叡山に奉祀する代表神社、山王

権現又は百舌權現と称している。

比叡山は延暦寺創立以前より神の鎮まる聖地と知られ「古寺記」には大西より大山時神鎮座の聖山なりと記されている。

ところが、後、延暦二十三年嵯峨浄御孫、のころに武勇を以るに當り、大和の三輪山に發誓する大三輪神を比叡山に勧請して、定めた天台山の守護神である。山王に因りて、山王権現と尊称して天台宗の守護神とし、大西の本地仏、表裏の靈、なりと考へ、これがいわゆる大住尊である。

よつてここに本来より總、すか大田野清三、言ひ、地師菜師の畫造とし、小比叡と稱し、ここに大田野清三の二社に因つていたと云ふ。

その後、聖眞子の本地仏淨道三社を、山王三社又は三聖とした。その後、奥に八王子、岩入、十傳神、三宮を加えて之を三社とし、更に心を擴して大行寺、牛頭寺、新待尊、八王子、草履、王子、雲女、中社、山崎、大宮、下田、岩流、氣比、三聖、藤原、藤原、下七社を加え、正神下社を合して山王二十一社と稱した。

この山王権御は、平安時代に天台宗の教派に
に依りて、守護神として比叡山に祀った事に始まり、
延暦寺が盛大にならにづれて、山王権現も次第に隆盛
され、鎌倉時代には、神仏習合派としての山王一実神
道が形成され、室町時代に民間信仰としての基礎が基
礎が確立されたのである。

そして、この頃より山至二十一社の本知佛種子を表
わした板碑も造られ、その権御は全脚形に基がり、日
吉山王は三千八百社を起すに至つたという。

なお、山王二十一社と本知佛種子の関係は次の通り
である。

(右が山至二十一社 カツコ内が本地佛を表わす)

上七社

注 及守は小沢河平氏の板碑入り一五三頁
に依る

- 大宮 一宮 (聖蹟音) 八王寺
- (聚蓮) (養神) (阿弥陀) (千手観音)

- バツ バイ キリーク キリーク

石(石) 石(石) 石(石) 石(石)

註 ○内碑文 原文字は筆迹研究解説もある

- 密入 十権御 三宮
- (十一面観音) (地蔵) (普賢)

石(石) 石(石) 石(石) 石(石)

中七社

- 下八王寺 王子宮 早屋 大行寺
- (虚空蔵) (文殊) (不動) (毘沙門)

- タラーク マン カーン バイ

石(石) 石(石) 石(石) 石(石)

- 嬰女 新行寺 半獅子

- (如意輪) (吉祥天) (大蔵尊)

- キリーク シラー キリーク

石(石) 石(石) 石(石) 石(石)

下七社

- 二尊聖殿 山末 水十禅 氣比

- (前大日) (薬師文) (密樹) (曼鏡音)

- アーンク マ カーン サ

石(石) 石(石) 石(石) 石(石)

唐 澁

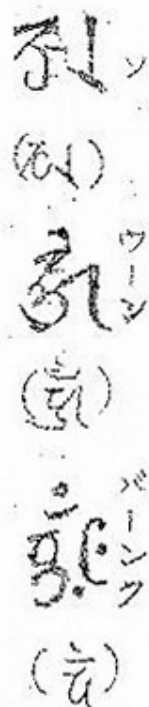
靈王子

大尊靈殿

(弁才天)

(愛染)

(金大目)



三 越谷市増林の山王二十一神板碑

越谷市増林本町、縁師壁にあるもので、数少ない二十
十一神板碑であると書つて良い。昭和廿六年三月一三
に、埼玉県指定文化財になつてゐる。

この板碑には板碑特有の項部三角部に二条の切り込
みがなく、板碑全般に云えることだが、板碑成立期の
最終期を示している。

この種の板碑は、日蓮宗の鎌倉板碑に多く見られる
上部日月、天蓋の下に虚空蔵を主尊として四行主殿の
種子を刻み、その中に二行で天正三年乙亥八月吉日の
銘があり、さらにその下に、前紙をおき二十数名の入
名が刻まれている。造り趣極口上部に甲符候様と二
行である。

どこかで上部にある日月を表わす二つの円について
太極式様改はその新「預申塔」において、越谷市の天
正三年の山王二十一社の甲符候様は二つの円て、日
月と見るべきが、日とみるべきが、はつまりしだい

ところがあると考えられているが、私は、他の二十一神
群の遺例との他を考えて右側が月輪、左側が日輪と
ると思ふ。つまり右側の円は新月と見るべきであらう。
なお、越谷市増林本町の山王二十一社の「家内宛録
要」の最初には、次のように記されている。

「武蔵国埼玉郡増林村 山王宗大先祖 尊願三郎三郎
慈光庵を建立す。縁師即東を流永法師之御持りにて
基後、天正三年八月 甲符候様を建立す、云々」とあり
高之一五三〇、巾四六〇である。

上段書

甲符候



十三社 増林寺

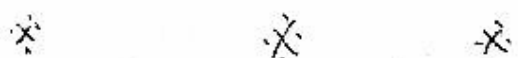


文正三年(1471)

高1.20m 径 25cm (49)

現在地に発見されてゐる二十一伊弉諾は、次のようである。由〇印は越谷市に在り、△印に在る

年号	月	日	干支	西暦	所在	地
永正	十五年	十一月	戊寅	一五二八	川口市西新井宿	
天文	四年	十一月	乙未	一五三五	葛飾区立石	商祿院
天文	廿一年	十一月	壬子	一五五二	越谷市 西考	田向廻世
弘治	二年	十一月	丙辰	一五五六	葛日部市豊巻	兼師堂
永禄	元年	十二月	戊午	一五五八	越谷市 大房	朝神神社
永祿	〇年	十一月			大葛市 越谷堂跡	
元龜	三年	二月	壬申	一五七二	越谷市 西考	道福神
元龜	四年(慶應)	二月	癸酉	一五七三	文京区小口向	百輪寺
天正	二年	十一月	甲戌	一五七四	北条御郡松伏町上赤岩	
天正	三年	八月	乙亥	一五七五	越谷市増森本田	兼師堂
天正	三年	十月	乙亥	一五七五	越谷市栗川林七六	
天正	五年	十一月	丁丑	一五七七	越谷市 千足	東藏寺
天正	六年	二月	戊寅	一五七八	松戸市越ヶ崎	千仏堂
天正	八年	三月	庚辰	一五八〇	越谷市増森上越	壘地
天正	十四年	四月	丙戌	一五八六	大葛市三番一丁目	
天正	二〇年(政務)	三月	壬辰	一五九二	大葛市堀田谷本	中作田
不詳					高崎五郷八潮町	
不詳					東葛飾郡沼南町	越ヶ谷
不詳					葛飾区御久喜町	日榮院
不詳					比叡郡飯沼町杉戸町杉戸	
不詳					越谷市 御殿路傍	



二十一佛板碑は全園でも珍らしく、発見例は表で見
る通り数枚極めて少ない。特にその分布は前王塚東部
地域に偏在し、徳師千々和堂先生の調査された板碑
主義集東地域と云われる田比企部、旧大里郡に一基も
存在していない。又山王信仰が山舌信仰であるのに、
旧荒川、旧利根川と云った河川沿岸の下流沿いに多く
分布することは、極めて注目すべき事である。

私はこのような埼玉東部に二十一仏板碑が数基備
在する事は、当時荒川上流地域より流行して来た板碑
遺存思想と、比叡山より生まれて来た山王信仰の感徳
とが、互に發祥地よりかなり離れた埼玉東部武蔵野地
域において時期的に見ても地歴的に見ても、両者がこ
まかい具合に結び付く理由も得つていたのでないかと
思つてゐる。

何れにしても山王信仰の本質にかかわる問題である
ので、これから大いに研究の手を差支はせねばならな
い分野であると察す。

以上、誠に簡陋であるが、二十一佛板碑についての少
なりとも御理解いただければ幸と存じます。

なお、本稿を成すに当り、便宜をいただいた水沢信
次郎書儀長に末届ながら厚く御礼申し上げます。

※ 参考文献

- 服部清三郎著 板碑研究 板碑入門
- 千々和 與善 武蔵国板碑集
- 萩原 龍天著 旧利根川畔の中世文化 聯合文庫
- 岩中憲徳会編 東中
- 星野 馬治著 越谷市の板碑研究 (一)

二十一佛板碑調査

- 種別 泉信定考治遺著
- 名称 二十一仏板石佛堂
- 所在地 昭和三十六年三月一日 越谷市大寺贈森



天正三年八月 建立されたものとして市内遺跡の調査成
果に逐次された。記録の最初には「武蔵国高麗郡越谷村
小宮家大先祖尊像二年二月後元運を建立す。尊像建立
を覺永法師の御掛りにて兩基。後天正三年八月甲戌
佛堂を建立す」と記されて居ることから、寛永二年
に佛堂がたとえられる越谷町が建立された一五と出目の
天正三年八月に境内に建立されたものである。

越谷市歴史文化 一巻

昭和四五年六月第三十三回史料めぐり資料に二十一
 社の研究を呈覧會で発表され、その時向題として提
 起された「東部地区への偏在の理由」について小正の
 考察した範圍に於いて提示し大方の御意見を承り度い

理由 山岳信仰と鎮倉齋府初祖の政治的遷移。遠近
 その端は義經の奥州下向に鞍馬の隱居所が在った
 その役割は大部様と称する「大十六面遊行書」を主
 力とした。隨つてこの行志、修験者は皆一芸に達し
 た者を先達として案内せられた。先達の資格亦嚴しい
 處因の結果

(1) 奥州路日光路に隨する塚所を修験者で監視させ近
 の奥地に修験道場をつくり隅田の荒路山道を見守れた。

山王権仲が山岳信仰であるのにも旧荒川
 旧利根川の河川沿岸の清流沿いに多々
 分布する理由の考察
 三原生

(2) 修験者修験系分布因を照らかな通り中心は幸手不動
 で其の範圍には利定方面大蔵村。他の一日遊谷の
 東方西方(大伏)を置く(元大社)東光院利生院(大
 聖院)(大聖寺)山不動堂)神王院(鹿寺)他東方
 密教寺兼王寺觀音寺を曳立大聖寺本寺及幸手直系の
 奥州院海老原大正院(塔林)江戸吉田真嗣寺末經戸
 大治村香取社或東方五藤院普門總寺限りない
 時を經て室町末期から戦国時代の廿一傳亦故あり

西方村	山王寺	本山幸手	元大社大伏の機	創社年月	西征紀元	傳	考
	聖下東光院						
東方村	利生院						
	神王院						
	安樂寺						
	福王寺						
	觀音寺						
	五藤院						
	普門院						
東光院		大岳天正中大聖寺中興の人間人					

飯橋村	金剛院	〃			
壽壽村	慈光院	〃			
柳生村	南極院	〃			
〃	神願院	〃			
古河川田村	別當密濟院	〃			
〃	文殊院	〃			
和戸村	別當本覺院	〃			
須加村	龍光院	〃			
内牧村	南極院	〃			
春日部	弘東院	〃			
〃	香門院	〃			
八条領	妙覺院	〃			
神明下	大行院	〃	幸手不動院配下		
大沢	南極院		本山修験		
〃	大徳院				
〃	王宮院				
〃	海谷院				
母山社	飯詰寺				
鳳来村	重徳院				
幸手郡下分					
大海	香取社				
〃	大正院				
〃	龍光院				

上大河村 洞主殿の跡あり。龍野白山合社(古大社)

空幡寺 上分に在り (法蓮坊、善方、善林坊、善林坊)

(不動坊、山本坊、明見坊、七三村)

慈性寺 下分に在り 小山氏系譜あり、鎌朝時代より

東承坊 鏡鏡坊

初級院 幸手不動院配下 三峯山と号す

吉本坊

大泉院 蓮台坊と号す

真敬院 五帝山と号す 築師堂あり、不問、兼師と云う

藤本坊 上分に在り。其の百向のる寺が尋方ありき

東方、西方、五善城地区は旧利根川と旧荒川沿いの地所を全部西の渡部河の網さのべれることが出来ない。

この鎌倉の名残りが至耶に至り吉河公方と幸吉との因連が繁茂をまし、未明から鎌倉の標榜を甚だしく致し世上の無情感は愈々まし、弘治、永禄、元龜、天文文禄にわたる戦火のまき添いは愈々濃くなつて来た。

川西原北条と岩槻殿主との關係、古河と上杉から本殿后は秀吉と山田原の關係に至つてこれら興亡の陰に無情と遁白、扇霧にまつわる寺院の役割は大きく、細り山岳信仰に限らず、眞實眞宗系、勝跡行者を同わす入生のパツクポーンとして十三社、廿一社の場となつて眞實されたものと考えるのである。個々中殿が山岳界中心で表現型態に特徴付けられたに過ぎないだろう。

以上 幸手院下の直置文範修験者のたむかする地であるが、この外に奥州修験行人の修験場として江戸青田鳳南寺傘下のも、江戸音羽山系のも、大祖山城系の三里院系のもの、下総阿字系系のものなど合計で八十有餘ヶ寺散在している。その中から当地域に修験者の利根川入派について調査しよう。

江戸音羽町音羽院系 江戸吉山鳳南寺

1. 瀧澤寺 2. 法性寺(龍ヶ谷) 3. 龍王治處

4. 大橋院(谷)

尾崎村常寂寺配下(羽黒直系の修験)(地所配)

圓照院 下大崎村 河原井大藏院、長家寺、常徳寺

彌禰寺 野里院 聖徳院 直徳院 喜徳寺 源徳寺

羽黒社寺。山王社(五箇根) 大瀬院(村本村)

4. 音羽古寺 一ツ木禪海寺(山東岩城談三宅院系)

古荒川の内 淨音寺 東郷禪禪寺系(羽生の元大社)

第二 この修験者は太平の天下に於いては文化交流の一翼を担っている。一は京都直系の文化を武蔵經由の奥州迄。奥末邊文化の地方化に足跡を残す。他京の先を行く。一は民間の山岳信仰が奥州信仰となり、庄に事よせて 言わざば、神かた、尾猿に類ひ付く寺或講に事せて伊せ爾太子、神御嶽、講士講せど参詣と混み合わせ見聞を広める性達ともなつて来た。当該地区に金剛杖の愛し幸も六平の中の慶型と定むれる。